

南相馬との出会いから

支援センターわかぎ

支援部長 古橋 誠

あの忘れられない未曾有の大震災から1年。地震・津波・放射能で平穏な日々の生活基盤を奪い去られた現地。そして未だに復興の道筋すら立っていない現実。同じ日本人として人間として心を一つにしていきたい。そう願わずにはられません・・・

震災後から、私たちにできることは何かと問い、様々なルートで被災地支援を検討してきた。昨年5月のゴールデンウィークに、稲松理事長はじめ4名の職員がキリスト教社会事業同盟でつながりのある岩手県の奥中山学園が主催して、宮古教会で行われた復興支援イベントに出掛けた。その際に、津波で全壊した障害者支援施設に訪問し、お手伝いできることがあればと申し出たが支援の依頼には至らなかった。

秋には私自身も南三陸町へガレキ撤去のボランティアに参加し、現地の情報収集もした。その後も、知的障害者福祉に携わる法人として障害者支援の専門性を活かした支援ができればと思いつつ、現地とのパイプが繋がらないまま時間だけが過ぎていった。



3.11 から何も手がついていない住宅

8ヶ月が経過した11月下旬、浜松市の通所施設を主に運営する法人の交流パーティーにご招待いただいた際、シンポジウムで福島県の『NPO法人さぼーとセンターぴあ デイサービスぴーなっつ』の郡(コオリ)施設長のお話を伺った。

さぼーとセンターぴあは、南相馬市で「ぴーなっつ(生活介護)」「ビーンズ(就労継続)」「えんどう豆(地域活動支援センター)」を運営し、南相馬や周辺地域における日中活動支援の中心的役割を担っている。福島第1原発から半径25Kmに位置し震災直後から被爆の不安が常につきまとう場所。半径20Kmの避難指示区域からは外れたものの、市民の多く特に子どもを持つ家庭は自主的に避難し、人口7万人の街は1万人までに減少した。現在は半径10Kmまで制限が解除され、人口も4～5万人にまで戻りつつある。

そんな中、「目の前にいる助けを求めている人たちがいる」と南相馬に留まった志に感銘を受け、何かしらのお手伝いができればと思い、講演後ご挨拶に伺い名刺交換させていただいた。

その後、二度南相馬市に伺い、青田法人理事長や郡施設長から直接、震災後の様子やさぼーとセンターぴあの実践をお聞かせいただいた。その内容は平穏に暮らす私たちには、想像を絶する現実の連続で、報道では知りえない現地の実情を痛感させられた。

震災以降、復興支援の流れは震災直後の物的支援から必要な人的支援へと変わり、最近では「自立へ」と変わりつつある。しかし、福島の場合は様相が違う。放射能への不安から避難を続ける人たち特に若い働き手が市に戻ってこない。さぼーとセンターぴあも同様に、震災前から働いていた職員が離職され、新たな職員は経験が浅く雇用が安定しないようだ。

それらのお話を聞かせていただき、小羊学園として1年間応援できないかと内部調整し、郡施設長に人的派遣の意向をお伝えした。自立へ向う気持ちと体制が整わない現実との狭間で気持ちの揺れもあったようだが、私どもの思いを受け止めてくださり、職員派遣の準備に取り掛かった。

準備の関係で年度当初からの支援はできなかったが、派遣の調整を行い、このゴールデンウィーク中に現地に入り引越し作業を行った。生活拠点として、さぼーとセンターぴあ理事の遠藤さんの旧宅をお借りすることができ、5月7日から「ビーンズ」で支援と学びの場を与えていただく運びとなった。

